

# 大雨浸水に関する農作物等の技術対策について

令和6年7月9日  
山形県農業技術環境課

7月7日からの大雨の影響で、一部の圃場への浸水が発生しており、今後も断続的な降雨が予想されているため、農作物への影響が懸念されます。

については、農作物への被害を最小限にとどめるため、下記を参考に、地域の実情を踏まえ技術対策を早急に講じるようお願いします。

## 記

### 1 共通事項

- (1) 作業は、安全に十分配慮し、焦らず落ち着いて行う。水路や河川等は引き続き増水や氾濫の危険があるため、降雨がおさまり、水路等の減水を確認してから、圃場や施設を見回り、速やかに対策を講じる。
- (2) 浸水、冠水した圃場で、停滞水が多い場合は、排水路の整備やポンプアップを行って、早急に排水する。
- (3) 停滞水がない圃場でも、農作物が弱っている可能性があるため、その後の生育経過をよく観察し、速やかに生育の回復を図る対策を講じる。
- (4) 圃場に土砂等が流入した場合は、関係機関に連絡するとともに、流入した土砂等を適切な方法で速やかに除去する対策を講じる。

### 2 水稲

- (1) 冠水した場合は、葉先だけでも、水面に出すよう速やかな排水に努める。
- (2) 冠水や浸水の被害を受けた場合は、根の活力が低下していることから、新しい水と交換し、田面を過度に乾燥させないように、こまめに間断灌水を行い根の機能維持に努める。
- (3) 稲体の損傷や体質の低下等の影響で病害虫の発生リスクが高まるため、圃場の観察をこまめに行い、早期発見と適切な防除に努める。
- (4) 穂肥済みの圃場は、水が引いた後に生育が回復してこない場合があるが、安易に再度追肥を行わず、水管理等で根圏環境を改善し草勢回復を図る。

### 3 大豆

- (1) 滞水した場合は、根腐れしないよう速やかな排水対策を行い、根の活力を回復させる。排水後も安心することなく、地下水位の低下を図る。また、土壌に酸素を供給するようにして根の活力を回復させ、生育が回復するよう管理する。
- (2) 土壌の固結や過湿状態を改善するため、作業可能な土壌水分になったら速やかに中耕培土を行い、通気、透水性の確保に努める。その際は、断根や茎葉の損傷等に注意しながら作業を行う。
- (3) 明渠や排水溝の点検・補修、溝と溝の接続や排水口への連結を行うなど、今後も速やかに排水が行われるように、もう一度排水対策を実施する。

## 4 果樹

- (1) 圃場内に停滞水が見られる場合は、明渠を掘り、速やかに排水する。
- (2) ぶどう「デラウェア」は、収穫時に裂果が見られる場合は、出荷調整・選果を徹底する。  
また、運送時の裂果が懸念されることから、収穫後1～2日静置し果実の水分を抜いてから出荷する。
- (3) ももは、日照不足が続くと、着色よりも果肉の熟度が進むことが懸念されるため、地色や硬度を見ながら、適期収穫に努める。
- (4) 降雨・曇天が続くと、りんごの黒星病、西洋なしの輪紋病、ももの灰星病など、果樹全般に病害の感染・発病が多くなるため、防除間隔に留意し、晴れ間を逃さず防除を行う。  
なお、大雨の影響で、前回の防除効果が低下している可能性があるため、次回の防除時期を早めるか、補完防除を実施する。
- (5) 果樹全般において、枝が重なり樹冠内部まで光が届かない場合は、支柱の手直しや追加等により枝同士の間隔を十分に空けるとともに、枝の間引きや摘心、徒長枝の整理を行い、樹冠内部や下枝まで日が射し込むようにする。
- (6) 発病した葉や果実等は伝染源となるため、早期に取り除いて圃場外に持ち出し適切に処分する。

## 5 野菜

降雨で土壌が過湿になり、日照不足で同化養分が不足すると、草勢が低下し、病気が発生しやすくなることから、曇天後の強日射・高温に備え、早期の草勢回復、病害防除の徹底を図る。

### (1) 共通

- ① 浸水した圃場は、土壌水分が著しく多くなっているため、この状態が続くと地温が上昇すると、根傷みを起こし草勢低下につながる。圃場を見回り、早急に排水溝・明渠の補修等を行い、排水を促す。圃場が乾き作業が可能になったら軽く畝間等の中耕し、土壌の通気性や透水性の確保に努める。
- ② きゅうり、トマト、なす等の果菜類では、着果負担軽減のため不良果を中心に摘果する。
- ③ 草勢が低下している場合は、追肥や葉面散布を適宜行って草勢の回復を図る。
- ④ 根腐れや疫病、軟腐病等、病害の発生が多くなることが予想されるため、圃場の見回りを行い、病害の早期発見と適正防除に努める。なお、草勢が低下していると薬害が発生しやすいので、防除は気温の低い時間帯に行う。
- ⑤ 古葉を中心とした摘葉や、整枝・誘引を行い、受光の改善を図る。ただし、降雨直前や降雨中の摘葉、整枝は控える。
- ⑥ 収穫適期に達した品目は、出荷時の調整・選別を徹底する。

### (2) 施設栽培

日照不足による軟弱徒長等を防止するとともに、曇雨天後の強い日射による萎れや葉焼けを防止するため、きめ細かく遮光資材の開閉を行う。また、多湿にならないよう、施設内の空気循環や換気の徹底を図る。

### (3) 露地栽培

- ① えだまめ、ねぎでは、土壌の乾き具合をみながら中耕・培土を行うが、高温が続く場合は無理に行わず、涼しくなるまで待ち、地温の低い早朝に行う。

- ②すいかやメロンでは、着果後の日数を確認して収穫を行うが、日照不足の場合、糖度上昇が遅れることがある。また、メロンのうるみ果など果実内部障害は成熟期の日照不足や、その後の草勢低下により発生しやすくなるため、必ず試し割りを行って糖度、肉質を確認し、収穫遅れとならないように注意する。
- ③アスパラガス、きゅうりなどでは、酸素供給剤を土壤に施用して、草勢回復に努める。

## 6 花き

- (1) りんどう等の露地花きにおいて、圃場が浸水・冠水した場合は、早急に明渠等の補修を行い、速やかに排水する。
- (2) 大雨の影響で、前回の防除効果が低下している可能性があるため、次回の防除時期を早めるか、補完防除を実施する。
- (3) 施設栽培では、施設内が浸水した場合、早急に圃場内の排水に努めるとともに、多湿にならないよう換気を徹底する。
- (4) 草勢が低下した場合は、窒素濃度 40~80ppm の低い濃度で葉面散布を行い、草勢回復に努める。
- (5) 作物に被害が発生した場合は、病害の発生や拡大を防ぐため、被害株の抜き取りや茎葉の摘除を行う。また、圃場の見回りを行い、病害の早期発見と適正防除に努める。なお、高温時の防除は薬害が出やすいので気温の低い時間帯に行う。

## 7 畜産

- (1) 畜舎等が浸水した場合は、天候が回復した後、速やかに施設内及びその周辺の排水を行うとともに、流入した土砂の除去に努める。また、施設内外の消毒を行い、疾病や害虫の発生防止に努める。
- (2) 畜舎、牧柵、防鳥ネット等の施設に破損がないか確認し、必要に応じて補修する。
- (3) 保管している飼料が冠水等の被害を受けた場合は、当該飼料の家畜への給与は中止する。
- (4) 浸水・冠水した牧草は、排水後できるだけ早く刈り取り、反転乾燥し土砂を落とす。また、浸水草地は雑草が侵入しやすいため、刈取り高さを 10 cm 以上とし、収穫後速やかに追肥して草勢の回復を図る。